

岡ミサンザイ古墳(藤井寺市)

ここは仲哀天皇恵我長野西陵の拝所/岡ミサンザイ古墳(5世紀末頃築造の前方後円墳)の前方部前面に所在する



そこで、左手を見たところ



同じく、右手を見たところ



「仲哀天皇惠我長野西陵」と刻まれた標柱が立つ



お約束の宮内庁のお触書



周濠越しに前方部の左手を見たところ



同じく、周濠越しに前方部の右手を見たところ



左手に回って墳丘を見たところ/左手が後円部、右手は前方部



そこで、右手を見たところ



同じく、左手を見たところ



前方部から後円部方向の周濠を見たところ



年代観からすると4世紀後半頃の大王(天皇)とされる仲哀天皇の墓としては、5世紀末頃築造の岡ミサンザイ古墳では合わず、真の被葬者は雄略天皇とされるようだ

さて、さきたま古墳群の稲荷山古墳からは「金錯銘鉄剣」が出土し、その銘文からワカタケル大王である雄略天皇の実年代が判明している

崩年干支・在位・宝算の一覧表 ()内は立太子又は生誕よりの計算

	日本紀崩年		古事記崩年		住吉大社 神代記崩年		在位年数		宝算	
	干支	西暦	干支	西暦	干支	西暦	紀	記	紀	記
1 神武天皇	丙子	-585					76		127	137
2 綏靖天皇	壬子	-549					33		84	45
3 安寧天皇	庚寅	-511					38		57	4
4 懿德天皇	甲子	-477					34		(77)	45
5 孝昭天皇	戊子	-393					83		(114)	93
6 孝安天皇	庚午	-291					102		(137)	123
7 孝靈天皇	丙戌	-215					76		(128)	106
8 孝元天皇	癸未	-158					57		(116)	57
9 開化天皇	癸未	-98					60		115	(111) 63
10 崇神天皇	辛卯	-30	戊寅	258	戊寅	258	258		実在する可能性のある大王	
11 垂仁天皇	庚午	70			辛未	311	99		140	153
12 景行天皇	庚午	130					60		106	137
13 成務天皇	庚午	190	乙卯	355			60		107	95
14 仲哀天皇	庚辰	200	壬戌	362			9		52	52
神功皇后	己丑	269					撰政 69		100	100
15 応神天皇	庚午	310	甲午	394			41		110	130
16 仁徳天皇	己亥	399	丁卯	427			87		110	83
17 履中天皇	乙巳	405	壬申	432	讚		6		70	64
18 反正天皇	庚戌	410	丁丑	437	珍		5		(77)	60
19 允恭天皇	癸巳	453	甲午	454	濟		42			79
20 安康天皇	丙申	456			興		3			56
21 雄略天皇	己未	479	己巳	489	武		23		(62)	124
22 清寧天皇	甲子	484					5			
23 顕宗天皇	丁卯	487					3	8		38
24 仁賢天皇	戊寅	498					11			
25 武烈天皇	丙戌	506					8	8		
26 継体天皇	辛酉	531	丁未	527	確實に現在の天皇に繋がる大王					
27 安閑天皇	乙卯	535	乙卯	535			2		70	
28 宣化天皇	己未	539					4		73	
29 欽明天皇	辛卯	571					32			
30 敏達天皇	乙巳	585	甲辰	584			14	14		
31 用明天皇	丁未	587	丁未	587			2	3		
32 崇峻天皇	壬子	592	壬子	592			5	4		
33 推古天皇	戊子	628	戊子	628			36	37	{ 73	75

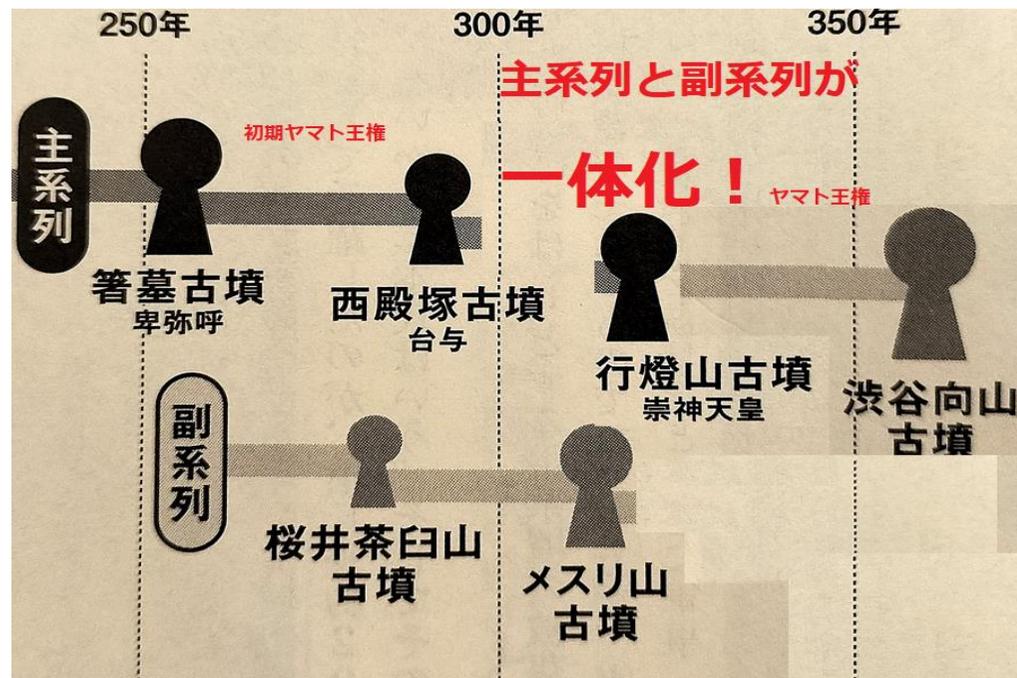
7世紀の後半の時代には、崇神より前の大王についての事績は良く分らなかった！

記紀による大王(天皇)の系譜が正しいとするならば、雄略天皇の崩年干支は479年頃と思われ、それを起点にして崇神天皇の実年代、倭の五王が誰なのか、継体天皇の時代に起こったとされる筑紫君磐井の乱の真相、そして武蔵国造の乱とは何だったのかなどについて追ってみたい！

まず、崇神天皇の実年代についてであるが、金錯銘鉄剣の銘文には、この鉄剣を作った人物の7代前が「オオビコ」という人物であったことが刻まれており、この「オオビコ」は崇神天皇の伯父で四道將軍に名を連ねるオオビコとされるようだ

田中卓氏の説をヒントに考えると、1世代＝30年とすると金錯銘鉄剣が作られた471年から7世代前、つまり5世紀後半当時の人々の年代観としてオオビコは261年頃に活躍していたと考えていたことが想定出来そうである(ちなみに、下図のメスリ山古墳がオオビコの墓とする見解もあるようだ)

また、古事記・住吉大社神代記では崇神天皇の崩年干支は戊寅と口伝により伝承されていたようで、諸説あるがこの年は318年とするのが崇神天皇の墓とされる行燈山古墳の造営時期などを勘案すると、最もしっくりいくように思われる



倭王権と前方後円墳/岸本直文 より 一部改変及び合成

倭の五王が誰なのか、雄略天皇は倭の五王の「武」という見解が多いようだが、まず古市・百舌鳥古墳群の様相を見てみよう

5期からより大きい古墳が築造されたことが読み取れるという

3 古市・百舌鳥古墳群の形成

古市古墳群の主要古墳を前方後円墳集成編年表に基づいてあげると以下のようになる。

4期 津堂城山(●208) 古室山(●150) ニツ塚(●110) 盾塚(◎64) 岡(□33)

5期 仲津山〔仲姫皇后陵〕(●290) 墓山(●225) 野中宮山(●154) 大鳥塚(●110) 高塚山(□50)

6期 誉田山〔応神天皇陵〕(●425) はざみ山(●103) 青山(◎73) 鞍塚(○39) アリ山(□45)
珠金山(□28)

7期 市野山〔允恭天皇陵〕(●230) 軽里大塚〔日本武尊陵〕(●190) 黒姫山(●116) 唐櫃山(◎53)
長持山(○40) 藤の森(○22) 野中(□34)

8期 岡ミサンザイ〔仲哀天皇陵〕(●242) 峯が塚(●98) 高屋八幡塚〔春日山田皇女陵〕(●85)
鉢塚(●60) 蕃上山(◎53) 矢倉(◎30) 青山2号(◎33)

9期 河内大塚山(●335) 野中ボケ山〔仁賢天皇陵〕(●122) 高屋築山〔安閑天皇陵〕(●122)
白髪山〔清寧天皇陵〕(●115) 小白髪山(●46)

前方後円墳集成の編年表は、川西編年Ⅱ期の埴輪を持つ古墳を期と4期に細分しているが編年指標に錯誤があり、廣瀬 覚氏のⅡ期を細分した編年に比べると津堂城山古墳の細かい時期などを把握しにくい。まず5期からより大きい古墳が築造されたことを読みとることができる。表なので巨大古墳の周囲に陪家と呼ばれるような帆立貝形古墳(◎)、円

大東文化大学オープンカレッジ 平成30年春「百舌鳥・古市古墳群の形成」講座資料より

なお、9期の河内大塚山古墳(墳丘長335mという巨大前方後円墳)については下記の別稿を参照してください！

- ・ 河内大塚山古墳(松原市)

100m級前方後円墳の被葬者には宋書に記された郡号を与えられたもの、200m以上の前方後円墳の被葬者には倭王、倭隋のようじ將軍号を与えられたが想定されるという

墳(○)、方墳(□)が形成されたことは判りにくい^ウが、王権を構成する人達の階層構造が垣間見られる。おそらく、方墳の被葬者には渡来系の人が含まれていたと推察される。また、100m級前方後円墳の被葬者には宋書に記された郡号を与えられたもの、200m以上の前方後円墳の被葬者には倭王、倭隋のように將軍号を与えられたものが想定される。古市古墳群には、10期の前方後円墳が認められないが、後述するように9期に前方後円墳が形成されなくなる百舌鳥古墳群に比べて、遅くまで前方後円墳が形成されていた。その違いを見るために、百舌鳥古墳群の主要古墳を前方後円墳集成編年表に基づいてあげることにしよう。

4期 乳の岡(●155)

5期 石津丘〔履中天皇陵〕(●360) 百舌鳥大塚山(●159)

6期 いたすけ(●146)

7期 大山〔仁徳天皇陵〕(●486) 土師ニサンザイ(●290) 御廟山(●186)

田出井山〔反正天皇陵〕(●148) 永山(●104) 長塚(●100) 丸保山(◎87) 城の山(●77)

定の山(◎74) 銭塚(◎70) 竜佐山(◎67) 収塚(◎65) 旗塚(◎56) 文殊塚(●53)

こうじ山(◎51)

8期

9期 平井塚(●58)

王墓の規模が時代と共に大きくなる流れは、7期の土師ニサンザイ古墳で止まったという

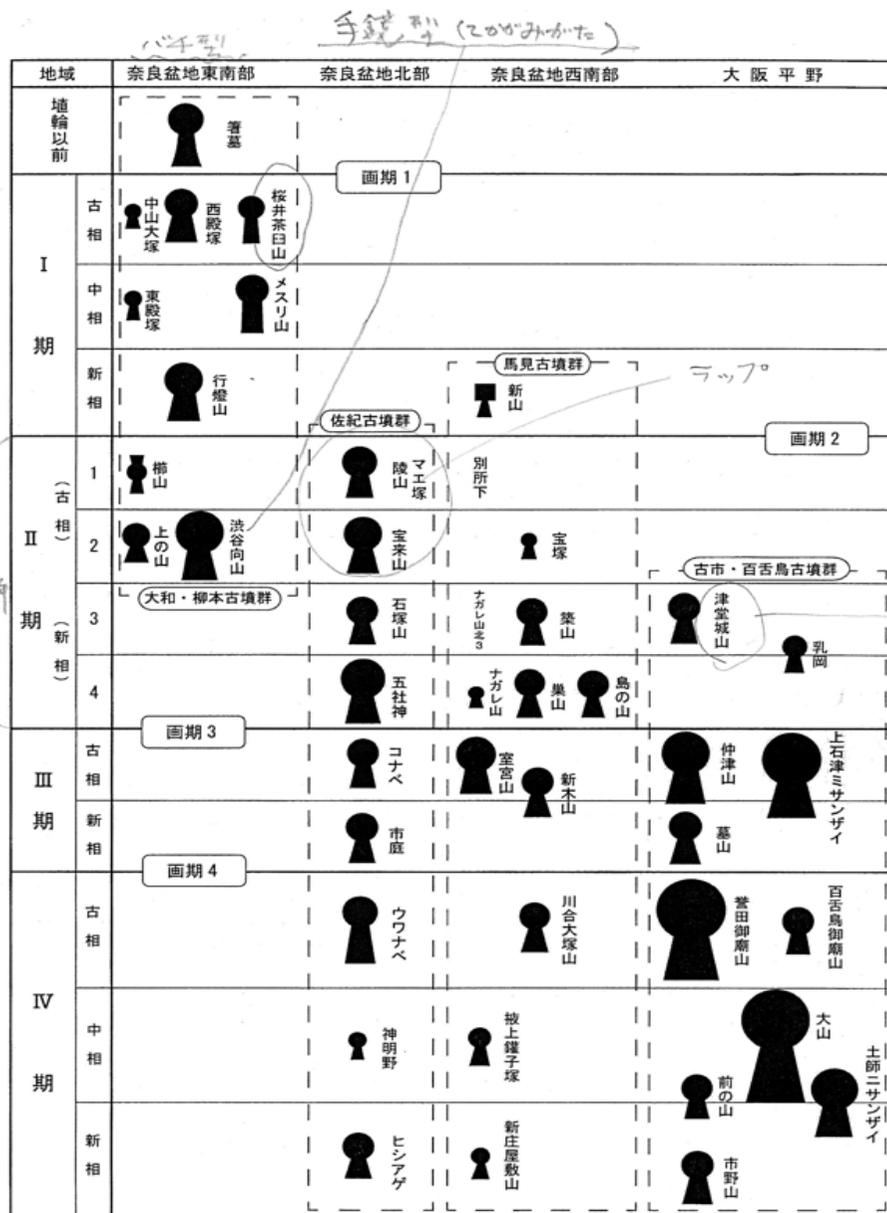
まず、廣瀬氏の円筒埴輪編年でみたように百舌鳥古墳群で4期となる乳の岡古墳は、円筒埴輪が2期3～4に移行する時期のものであり、津堂城山古墳よりも若干新しく、規模も小さい。5期の石津丘古墳は、これまで造営された前方後円墳中で最大規模を誇り、王墓であるのは確実である。6期に形成されたいたすけ古墳は200mに達せず、王墓とすることは出来ない。この時期の王墓は、古市古墳群に形成された誉田山古墳であり、5期の石津丘古墳よりも規模が大きい。7期に百舌鳥古墳群に形成された大山古墳は、誉田山古墳よりも墳長が長く、王墓と捉えるのが妥当である。このように古市古墳群と百舌鳥古墳群には、王墓が交互に形成されていたが、同じ7期でも大山古墳より新しく、規模の小さい土師ニサンザイ古墳が継続して百舌鳥古墳群に形成される。そして、8期最大の岡ミサンザイ古墳が形成されたのは、古市古墳群である。8期最大の岡ミサンザイ古墳を王墓と捉えると、それとほぼ同じ墳長の土師ニサンザイ古墳も王墓になるだろう。王墓の規模が時代と共に大きくなる流れは、土師ニサンザイ古墳で止まったことになる。

百舌鳥古墳群では、6期・7期に60mを前後する帆立貝形古墳も多く形成されたが、8期にはそうした規模の古墳も形成されず、巨大古墳の造営は収束する。

このように古市古墳群と百舌鳥古墳群には、巨大古墳が交互に形成されており、造墓主体は同じであったと捉えるのが妥当である。こうしたことから巨大古墳の造営は、被葬者が生前から計画的に進めていたと考えられる。しかし、巨大古墳を交互に造営する原則が

大東文化大学オープンカレッジ 平成30年春「百舌鳥・古市古墳群の形成」講座資料より

なお、河内の古市古墳群と百舌鳥古墳群では、王墓と目される巨大前方後円墳が交互に形成されるが、造営主体は同じであったと捉えられるということだが、河内のエリアでも大王(天皇)を支える大豪族は一枚板ではなかった(たとえば、土師氏の中でも覇権争いがあった?)か、あるいは一氏族だけでなかった(土師氏や葛城氏?)ことで、そのパワーバランス(后を出すなど)により造営主体が交互し、そのために造営地が交互したのではないだろうか・・・



7

左図は円筒埴輪の編年から前期・中期を更に細分化し、実際の古墳を該当したもの/大東文化大学オープンカレッジ 平成30年春「百舌鳥・古市古墳群の形成」講座資料より

400年
5世紀の
東の
イロ→7ク

王権中枢部大型古墳群の消長と埴輪編年の画期
 廣瀬 覚『古代王権の形成と埴輪生産』より

5世紀代をアップで示したもの

期 (新相)	3	大和・柳本古墳群	石塚山	ナガレ山北3	築山	津堂城山	乳岡
		4		五社神	ナガレ山	巢山	島の山
III 期	古相	画期 3	コナベ	室宮山	新木山	仲津山	上石津ミサンザイ
	新相		市庭			墓山	
IV 期	古相	画期 4	ウワナベ		川合大塚山	菅田御廟山	百舌鳥御廟山
	中相		神明野	掖上鑓子塚		前の山	大山
	新相		ヒシアゲ	新庄屋敷山		雄略	土師ニサンザイ

400年
5世紀の
始まり
11→7ヶ

※ 雄略 岡ミサンザイ部分改変

さて、倭の五王はそれぞれ誰であろうか？

倭王(讚～珍～済～興～武)に関する文献記事

ここでは、藤間生大『倭の五王』岩波新書から五王の即位年等を引用し、巨大古墳と倭五王の対応関係を示す作業を行うことにする。

- ① 413年 義熙九年 倭国方物を献ず。(晋書安帝紀)
- ② 421年 永初二年 倭讚に除授。(宋書倭国伝)
- ③ 425年 元嘉二年 讚又、司馬曹達を遣わし方物を献ず。(宋書倭国伝)
- ④ 430年 元嘉七年 倭国王、使いを遣わして方物を献ず。(宋書文帝紀)
- ⑤ 不明 讚死して弟珍立つ。使いを遣わし貢献。自ら使持節都督倭・百濟・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事・安東大將軍・倭国王を称し、安東將軍・倭国王に除せられる。また、倭隋等十三人に平西・征虜・冠軍・輔国將軍号を求め、許される。(宋書倭国)
- ⑥ 438年 元嘉一五年 倭国王珍を安東將軍となす。(宋書文帝紀)
- ⑦ 443年 元嘉二十年 倭国王済、使いを遣わして奉獻する。倭国王済を復た以て安東將軍・倭国王となす(宋書倭国伝)
- ⑧ 451年 元嘉二八年 倭王倭済を安東將軍から安東大將軍に進める(宋書文帝紀)
// 倭王済に使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事を加え、安東將軍は故の如し。并に二十三を軍・郡に除す。

- (宋書倭国伝)
- ⑨ 不明 濟死す。世子興、使いを遣わして貢獻する。(宋書文帝紀)
 - ⑩ 460年 大明四年 倭王使いを遣わして貢獻する。(宋書孝武帝紀)
 - ⑪ 462年 大明六年 倭王世子興を安東將軍・倭国王とする(宋書倭国伝)
 - ⑫ 不明 興死んで弟武立ち、自ら使持節都督倭・百濟・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国書軍事・安東大將軍・倭国王と称す(宋書倭国伝)
 - ⑬ 477年 昇明元年 倭国使いを遣わして獻物する。(宋書順帝紀)
" 封国はで始まる上表文を出す。(宋書倭国伝)
 - ⑭ 478年 昇明二年 倭国王武を安東大將軍となす(宋書順帝紀)
" 上表文を出す。使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍・安東大將軍・倭王に除す(宋書倭国伝)
 - ⑮ 479年 建元元年 倭王武を安東大將軍から鎮東大將軍となす(南齊書倭国伝)
 - ⑯ 502年 天監元年 倭王武を鎮東大將軍から征東將軍に進める(梁書武帝紀)

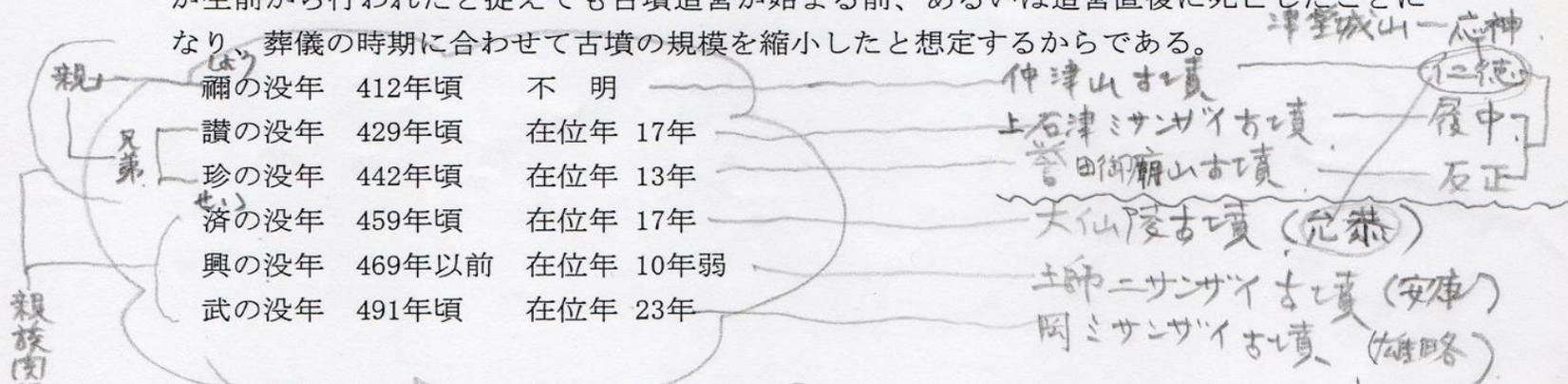
この年表の基になった表を作成した藤間生大は、そこから倭王の死亡と即位年をも類推している。筆者もその研究成果に従うが、倭王武の上表文に王の喪が明けてから軍事行動が行われたと記されることから、新たに即位した王が宋に使者を派遣するのも喪が明けてからと捉える。したがって、新王即位に伴う使者派遣の前年に旧王が没したと想定する。

倭王の没年と在位年

また、倭王武を稲荷山古墳出土の辛亥名鉄剣に記されたワカタケル大王に当てる立場から興の没年は、471年以前としなければならない。そこでオワケ臣が辛亥名鉄剣を製作したのを文面から倭王武の即位式典から数年後だったとみて、興の没年を469年以前とみる。さらに、『日本書紀』雄略紀が23年で終わるので雄略没年を491年以前と捉えることにする。

421年に使者を派遣した倭王讃の即位した年は不明である。その没年を429年とみると、それより16年前の413年に使者を東晋に派遣したのが讃であった可能性は十分考えられる。東晋に使者を派遣した契機は讃の即位にあり、その前年に禰と称したかもしれない王が没したと推定する。讃が交流の無かった東晋に使者を新たに派遣したのは、391~407年の朝鮮半島での度重なる戦いの敗北によって、失われた経済的拠点を回復するのに東晋の権威を利用する目論見があったからであろう。しかし、その東晋も頼りにならなかった。そこで東晋が滅び、劉裕が即位して宋を建国するや直ちに使者が派遣されたのだと考える。

以上の点を加味して、倭王の没年と在位年を類推しよう。在位年が短いと、古墳の築造が生前から行われたと捉えても古墳造営が始まる前、あるいは造営直後に死亡したことになる。葬儀の時期に合わせて古墳の規模を縮小したと想定するからである。



大東文化大学オープンカレッジ 平成30年春「百舌鳥・古市古墳群の形成」講座資料より

なお、讃の即位前に没した大王(天皇)を「禰」として讃・珍(及び済?)の親としているが、それは仁徳天皇なのかもしれない(ちなみに、その墓は仲津山古墳ということになるのかも・・・)

さて、以上のことから次のように想定することが出来るかもしれない！

試案		参考/大東文化大学オープンカレッジ 平成30年春 「百舌鳥・古市古墳群の形成」講座資料より			※仲津山の被葬者は仁徳、津堂城山の被葬者は応神か！？		
須恵器の編年	倭の五王(没年)	大王	古墳築造時期	実年代	前方後円墳集成編年		
			〈古市〉津堂城山		4期	4世紀後半	
布留式期			〈古市〉仲津山	410年	5期	4世紀末	
TG232							
			〈百舌鳥〉上石津ミサンザイ	415年	5期		
TG232				420年	6期		
TK73							
	讃(429年頃)	履中	〈古市〉誉田御廟山	430年	6期		
TK73				430年	7期		
TK216							
	珍(442年頃)	反正	〈百舌鳥〉大仙陵	450年			
TK216				450年			
TK208							
	済(459年頃)	允恭	〈百舌鳥〉土師ニサンザイ				
TK208				470年	7期	5世紀後半	
TK23	興(469年以前)	安康		470年	8期	5世紀末	
			〈古市〉岡ミサンザイ				
TK23				490年			
TK47	武(491年頃)	雄略		490年			
TK47				510年	8期		
MT15				510年	9期		
MT15				530年			
TK10							

継体天皇の時代に起こったとされる筑紫君磐井の乱の真相はどのようなものだったのでしょうか

銀象嵌銘大刀が出土したことで知られる熊本県玉名郡和水町の江田船山古墳(5世紀後半築造の前方後円墳)の被葬者は3名と考えられており、

一人目はこの古墳の築造者である5世紀後半の被葬者、二人目は5世紀末葉ないし6世紀初頭の被葬者、三人目は6世紀前半の被葬者という

銀象嵌銘大刀の銘文にはワカタケル大王(雄略天皇)の時代にムリテが典曹という文書を司る役所に仕えていたことなどが刻まれており、この典曹人のムリテが二番目の被葬者という

墳丘の周りには、短甲を着けた武人の石人が配置されており、石人山古墳に始まり、6世紀前半の岩戸山古墳で最盛期を迎え、以後消滅する、墳丘の周りに石人・石馬を配置するというこの地方独特の様相を示している

岩戸山古墳は筑紫君磐井の墓であると目されており、江田船山古墳も筑紫君一族の配下に連なった地域の中首長の墓と想像できるという

筑紫君一族の配下が時のヤマト王権に出仕していた(王権に組み込まれていた)ということを見ると、筑紫君磐井の乱がそれから間もない継体朝にヤマト王権と対峙するような大きな争乱であったとは思えないのだが・・・(ちなみに筑紫君磐井もヤマト王権に出仕していた時期があったとも思える記述が日本書紀に残っている)

※ 日本書紀では近江毛野軍の進軍をはばんで交戦した際に、磐井は近江毛野に「お前とは同じ釜の飯を食った仲だ。お前などの指示には従わない。」と言ったとされている(これは磐井も近江毛野と同様に、以前はヤマト王権に身を寄せる立場であったことを物語っているようにも読める)

岩戸山歴史文化交流館(八女市)のキャプションでは、筑紫君磐井にとって時の大王である継体天皇を「最大のライバル！」としている

しかし、『郷土の英雄「筑紫君 磐井」』としてみる郷土愛も結構なこととは思われるが、当時の政治状況下でヤマト王権に組み込まれていたと思われる地方の一豪族(大豪族ではあったようだ)が、大王とライバル関係にあると考えることには少しムリがあるのでは・・・

(当時、筑紫君磐井を上回るような大豪族は上毛野や尾張などにも存在している)

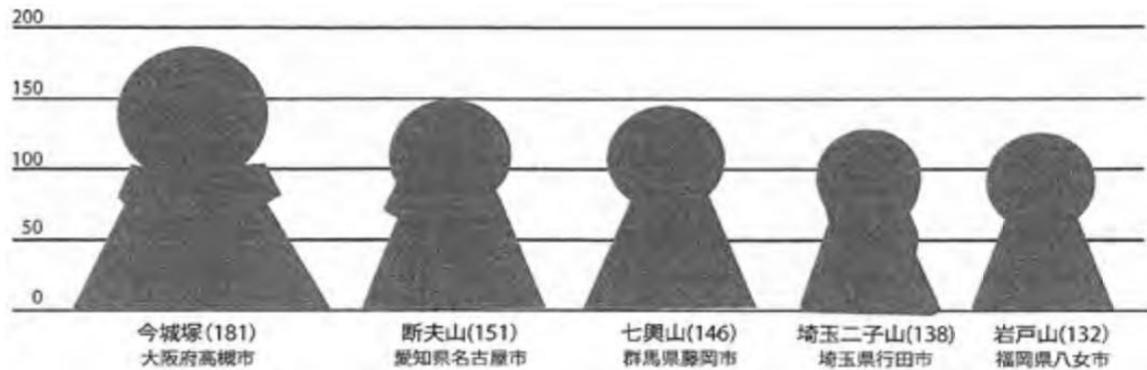


図 20 6 世紀前半の主要大型前方後円墳 (130m 以上)

「国立歴史民俗博物館研究報告 第 211 集 2018 年 3 月 東国における古墳時代地域経営の諸段階 上毛野地域を中心として 若狭 徹」より転記
 ※ 埼玉二子山古墳を除く諸古墳は、継体天皇の陵墓・今城塚古墳と相似形とされる(墳丘企画が同一で、その規模の大小が連帯関係を表象している)

※ 古墳の相似形とは、

古墳とは第一義的には墓であるが、大王墓や首長墓には権力の象徴を示すとともに地域間のネットワーク(連帯・連合)のツールとしての機能が付加されており、その意味合いから被葬者が生前から築造を開始する寿陵であり、墳丘企画を共有することがネットワーク(連帯・連合)の証となっていたと考えられる
 つまり、双方の古墳の墳形が相似形ということは、地域間のネットワーク(連帯・連合)言い換えれば親和的な関係が成立していたことに他ならない

継体天皇の今城塚古墳と相似形とされる主な古墳

- ・尾張連草香の断夫山古墳
- ・上毛野君小熊の七興山古墳
- ・筑紫君磐井の岩戸山古墳

いずれも6世紀前半～中頃の築造

『日本書紀』には・・・ヤマト王権の近江毛野が6万人の兵を率いて、新羅に奪われた地を回復するため、朝鮮半島南部へ向かって出発したが、この計画を知った新羅は、筑紫君磐井へ贈賄し、ヤマト王権軍の妨害を要請した。磐井は拳兵し、火の国(肥前国・肥後国)と豊の国(豊前国・豊後国)を制圧するとともに、倭国と朝鮮半島とを結ぶ海路を封鎖して朝鮮半島諸国からの朝貢船を誘い込み、近江毛野軍の進軍をはばんで交戦した。・・・というようなことが記されているようだ

一方、『古事記』には・・・磐井が大王の命に従わず無礼が多かったので殺した・・・とだけしか書かれていないらしい

また、朝鮮半島側の資料には、磐井の乱の記事は全く存在せず、新羅が磐井に賄賂を送ったとする証拠は見当たらないようだ

結果として、ヤマト王権軍と磐井軍の激しい戦闘の結果、磐井軍は敗北し、磐井は物部麁鹿火(ヤマト王権軍)に斬られたとされる

一方、『筑後国風土記』に於ける磐井の乱の記述では、その開戦は筑紫君磐井にとっては突然のことであったようで、「君」が示すようにヤマト王権に組み込まれて連綿と連帯してきた(岩戸山古墳は今城塚古墳と相似形とされる)のに「何故？」という思いだったのかもしれない。(日本書紀では惨殺されたことになっているが、筑後国風土記では石製表飾品の文化を共有していた大分県のエリアに逃げ延びていることになっている)

筑後国風土記は元明天皇によって全国に作成が命じられた風土記の一つで、在地の官僚が威信を掛けて現地を調査し土地の古老にヒアリングするなどしてまとめられたものであることや、官僚にとっては脚色などの記事を歪める必然性が全くないことから、ヤマト王権に都合よく脚色されやすい記紀よりも真実性は高いと考えられる

さて、真相は・・・

継体天皇が自分の従来の拠点近くに宮を置き、政務を執りながら、淀川水系に大型の準構造船が入港できるように開発したのは、磐井の横暴を止めるためという考え方もあるようだが、むしろ、継体天皇のミッションの一つであった倭の朝鮮半島の権益を守り、交易拡大のためのインフラと交易ルートの整備をすることが主眼であり、その構想に対して、独自のルートで朝鮮半島に交易を拡大し、北九州付近のヤマト王権の拠点整備に非協力的な態度であった筑紫君磐井は咎める必要があったのではないだろうか

結局、討伐された一番の原因は当時ヤマト王権が中央集権化を強化する一環として、国造制の普及(この頃まではまだ国造制は成立していなかったとされる)

と合わせて全国の要衝(水路と道路の結節点)に屯倉を置く政策が進められていた中で、それを良しとしなかった筑紫君磐井は反逆者に仕立て上げられたのではなかろうか。(ちなみに、その息子・葛子はその結末に屯倉を献上し、罪を問われずにその後も末裔は繁栄している/考えようによっては筑紫君磐井は掌握するエリアを筑紫に限定されるとともに領内に屯倉が設置されることを良しとしなかったが、息子の葛子はヤマト王権の申し入れに反対はしていなかったのかもしれない)

そして、物部麁鹿火軍は筑紫君磐井を取り逃がした腹いせに、岩戸山古墳の石人・石馬をことごとく破壊したという尾ひれが付く。(岩戸山歴史文化交流館に展示されている石人には腕が無く、石馬は頭部が無い)

丁度同じ頃に、「武蔵国造の乱」が起こったことになっており、その結果武蔵国にも四ヶ所の屯倉が設置されている/これも争いありきではなく、屯倉設置を推進した言い訳(正当化)として、国造職を巡る同族間の争いがクローズアップされたに過ぎないようだ/ 当時、日本全国に屯倉が設置されているのだが、何のトラブルもなく設置されている所がほとんどのようだ/つまり、6世紀前半はヤマト王権が国内の中央集権化を推し進める時代であり、その政策として屯倉設置があり、それに付随して屯倉を管理する組織として国造制・部民制といった統治体制が導入されていくことになったことを日本書紀は伝えていると云うことのように思えるのだが・・・

武蔵国造の地位を巡り、同族の笠原直使主と小杵が争ったという武蔵国造の乱とは何だったのであろうか

さきたま古墳群の稲荷山古墳から金錯銘鉄剣が出土したわけだが、出土した場所はこの古墳の被葬者の埋葬施設があるとされる後円部の墳頂中心部の脇の礫擲であり、金錯銘鉄剣とともに葬られた人物は稲荷山古墳の被葬者の親族(兄弟か子供)ではないかとされるようだ

さきたま古墳群は武蔵国造の奥津城とされ、武蔵国造の乱当時の国造、つまり笠原直使主の墓は最新の知見では二子山古墳になると思われる

	甘粕	金井塚	増田	斉藤	石野	増田	杉崎	増田	田中	甘粕	坂本	岡本	増田	太田	城倉	
	1970	1979	1982	1984	1985	1987	1988	1991	1994	1995	1996	1997	1999	2007	2009	
5c後	丸墓山	丸墓山	稲荷山	稲荷山	稲荷山・丸墓山	稲荷山	稲荷山	稲荷山	稲荷山	稲荷山	稲荷山	稲荷山	稲荷山	稲荷山	稲荷山	
6c前	稲荷山	稲荷山	二子山・愛宕山	梅塚	二子山	二子山・愛宕山	丸墓山	丸墓山	二子山	丸墓山	二子山	二子山	二子山・丸墓山・稲荷山礫擲	二子山	二子山	
	二子山	二子山		二子山・愛宕山	鉄砲山・奥の山		二子山	二子山・愛宕山	丸墓山	二子山	丸墓山・愛宕山	丸墓山	鉄砲山・愛宕山	丸墓山	瓦塚・天祥正寺裏・奥の山	
6c後	鉄砲山	鉄砲山	瓦塚	鉄砲山・瓦塚・中の山	瓦塚・中の山	鉄砲山・瓦塚	鉄砲山・奥の山	瓦塚	將軍山	將軍山	將軍山	將軍山	愛宕山・瓦塚・奥の山	瓦塚	瓦塚	鉄砲山・奥の山
	將軍山	瓦塚	奥の山	丸墓山・奥の山	將軍山	將軍山							奥の山	將軍山	將軍山	將軍山
7c前	(真観寺)	中の山	(丸墓山)								將軍山		浅間塚	中の山		
	(若王子)	將軍山	將軍山								浅間塚		戸場口山	浅間塚		

※各古墳の年代は大凡の目安であり、筆者が勘案したものもある。

第1表 埼玉古墳群における各古墳の想定時期の推移

稲荷山古墳の後円部から二つの埋葬施設が発見されているが、いずれも表層に近い浅い所にあり、レーザーによる調査では「真の被葬者」の埋葬施設はもう少し深い所にあることが判っている(国指定史跡になっており、発掘は出来ていない)

二つの埋葬施設(礫槨と粘土槨)の内、礫槨から出土した金錯銘鉄剣の両面には115文字の銘文が金の象嵌で彫り込まれていた(下記はその現代語訳)『オワケが、シキの宮で天下を治めていたワカタケル大王(雄略天皇)の親衛隊長であったことを後世に伝えるために作った鉄剣で、7代前の先祖はオオビコだ』武蔵国造の乱については 安閑天皇元年(534年)、武蔵国の同族である笠原直使主と小杵が、以前から折り合いの付かなかった武蔵国造の地位を争ったと日本書紀に記載されている

その内容は、小杵は関東全域に影響力を持つ上毛野(群馬)の豪族・小熊に支援を求め、笠原直使主を殺そうとした/それを察知した笠原直使主はヤマトに逃げ経緯を訴え出た/ヤマト王権は笠原直使主を武蔵国造と認め、小杵を誅殺した/笠原直使主は感謝のしるしに4カ所の領地を屯倉としてヤマト王権に差し出したというもの(同時期、上毛野の緑野も屯倉としてヤマト王権の支配下に入っている)

笠原直使主はその後、さきたま古墳群の系譜として武蔵国造の職を受け継いでいくことになる

上記の筑紫君磐井の乱の真相で言及したように、争いありきではなく、屯倉設置を推進した言い訳(正当化)として、国造職を巡るささやかな同族間の争いがクローズアップされたに過ぎないようだ

では、小杵の墓はどれであろうか？

諸説あるようだが、上記の表の坂本和俊氏の説によると、さきたま古墳の丸墓山古墳ではないかという

同族であり武蔵国造の地位を争う人物であれば、元々、さきたま古墳群のエリアに葬られても不思議はないようにも思える/ただし、小競り合いの末、国造職に就けなかったことで、その墳形は円墳となっているという(それでも国内で2番目の規模を誇る)

結果として、ヤマト王権が国内の中央集権化を推し進める政策として各地に屯倉を設置し、それに付随して屯倉を管理する組織として国造制・部民制といった統治体制が導入されていくことになる

武蔵国造笠原直使主の墓と想定される二子山古墳/北西側から周濠越しに見たところ/左手が後円部、右手は前方部

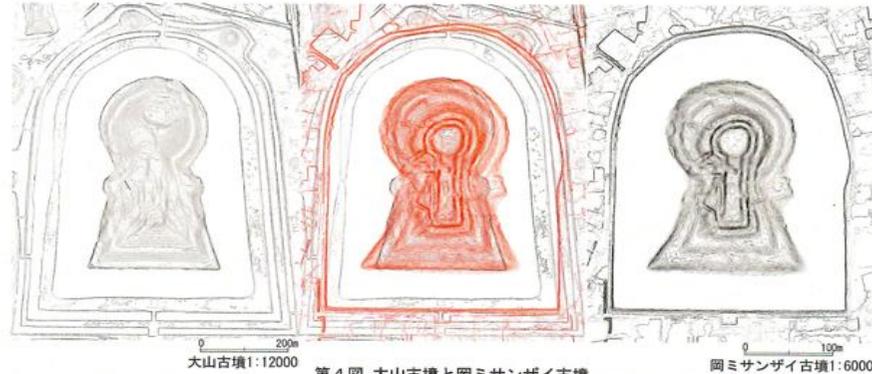
 [video](#)



さて、最後に岡ミサンザイ古墳の墳形について見てみよう

岡ミサンザイ古墳と大山古墳・土師ニサンザイ古墳等の墳形を比較した図

16



第4図 大山古墳と岡ミサンザイ古墳
墳丘図は『百舌鳥古墳群測量図集成』と『古市古墳群測量図集成』より引用



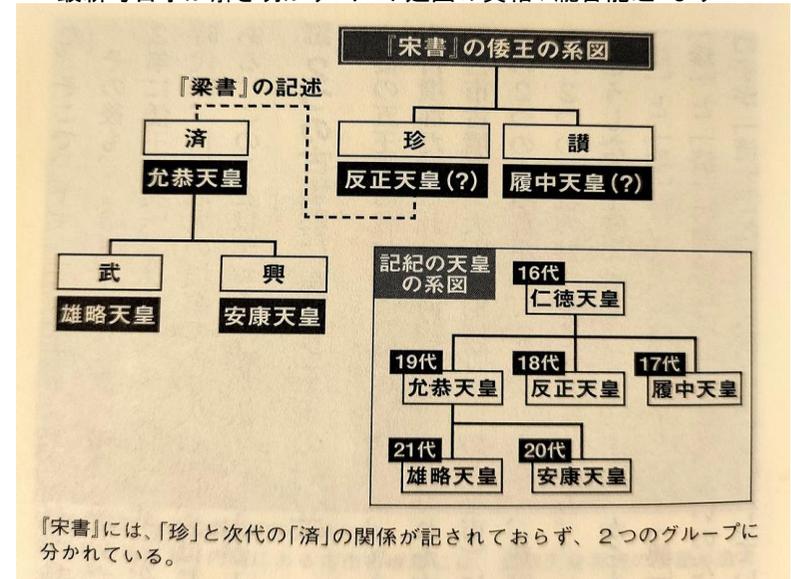
第5図 土師ニサンザイ古墳と岡ミサンザイ古墳
墳丘図は『百舌鳥古墳群測量図集成』と『古市古墳群測量図集成』より引用



第6図 岡ミサンザイ古墳と摩利支天塚古墳
墳丘図は『古市古墳群測量図集成』より引用

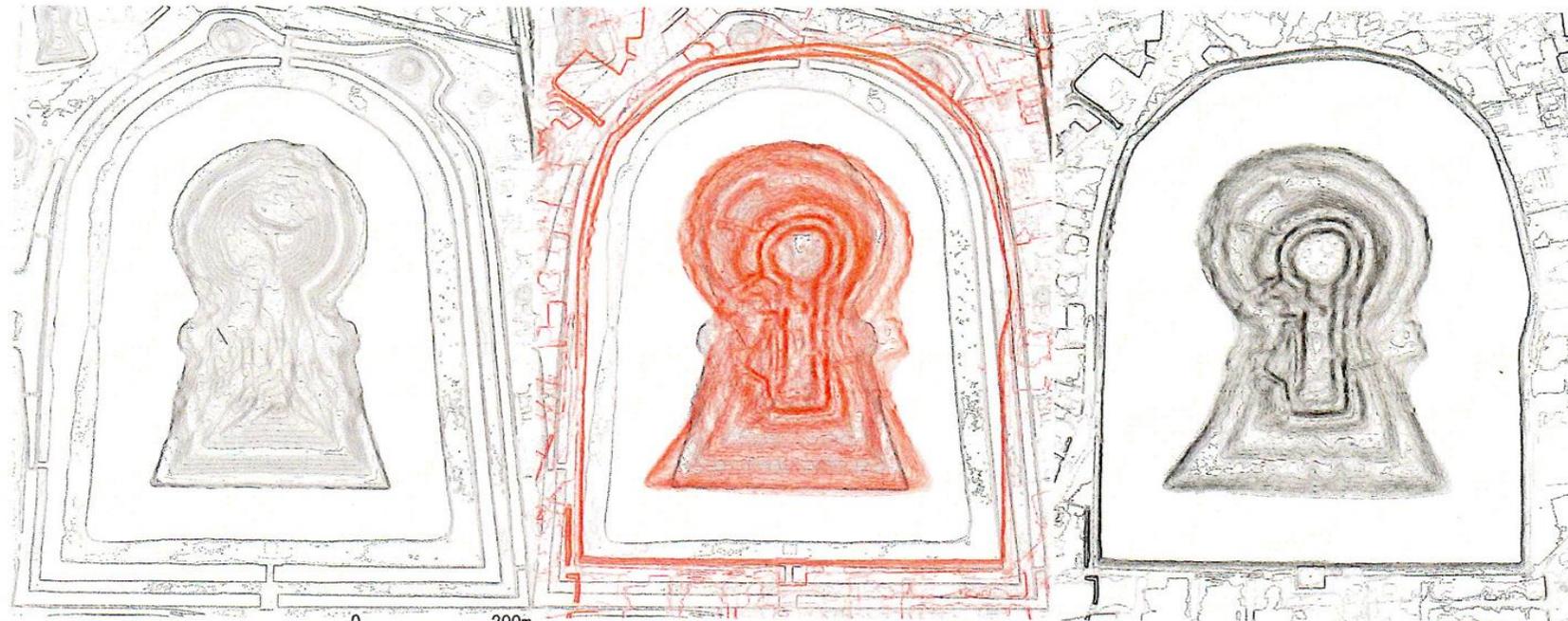
大東文化大学オープンカレッジ 平成30年 春 百舌鳥・古市古墳群の形成 講座資料 より

最新考古学が解き明かす ヤマト建国の真相 / 瀧音能之 より



『宋書』には、「珍」と次代の「済」の関係が記されておらず、2つのグループに分かれている。

拡大図/岡ミサンザイ古墳と大山古墳(雄略天皇の父である允恭天皇の墓とされる)の墳形は相似形



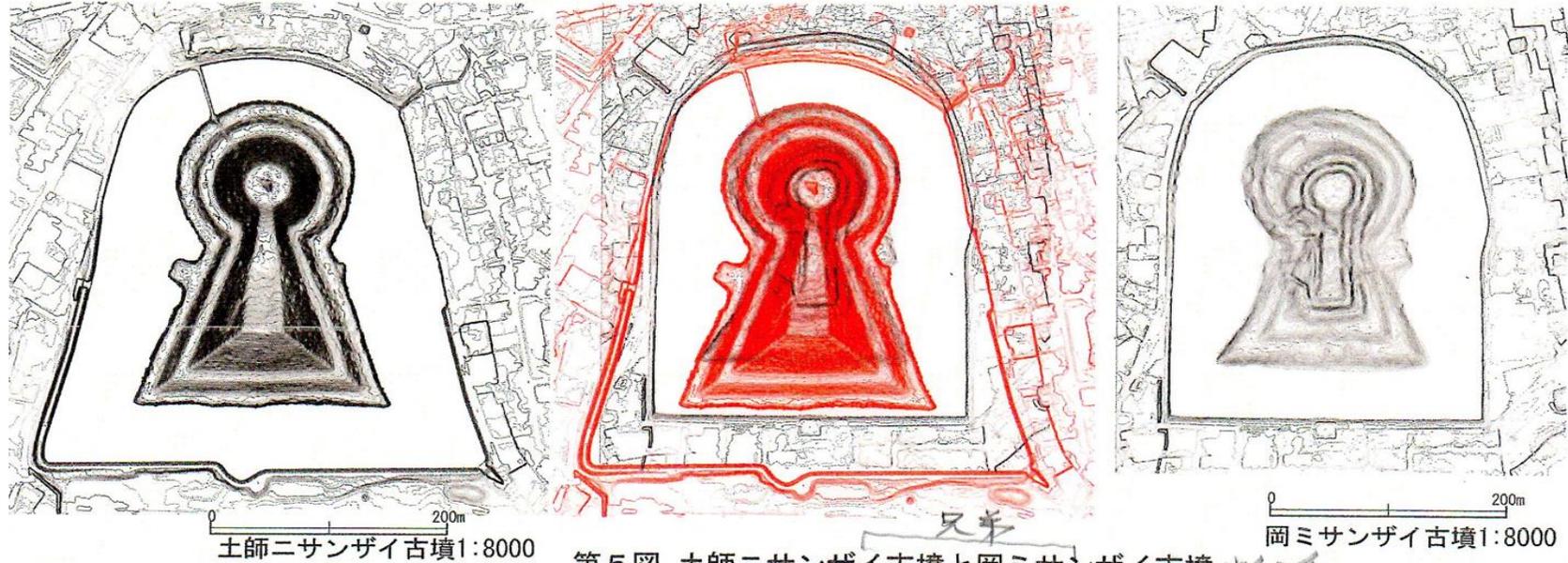
0 200m
大山古墳1:12000

0 100m
岡ミサンザイ古墳1:6000

第4図 大山古墳と岡ミサンザイ古墳

墳丘図は『百舌鳥古墳群測量図集成』と『古市古墳群測量図集成』より引用

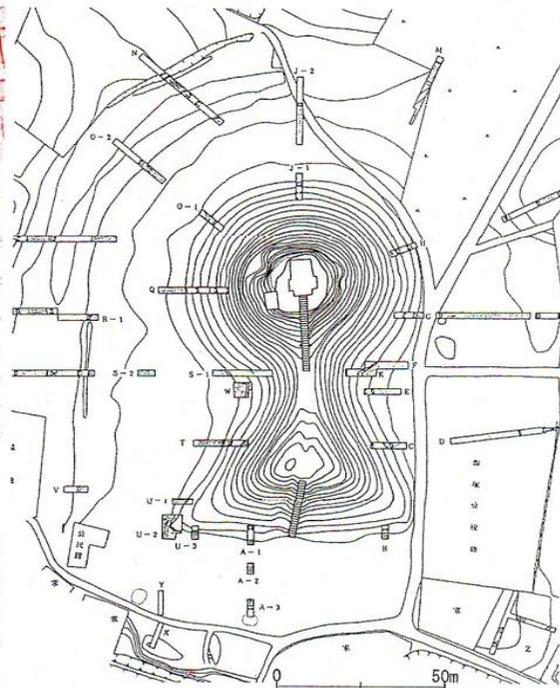
拡大図/岡ミサンザイ古墳と土師ニサンザイ古墳(雄略天皇の兄である安康天皇の墓とされる)の墳形は相似形



第5図 土師ニサンザイ古墳と岡ミサンザイ古墳 大田
墳丘図は『百舌鳥古墳群測量図集成』と『古市古墳群測量図集成』より引用

親子兄弟間では同じ設計企画の墓を築造したようだ

拡大図/岡ミサンザイ古墳と小山市に所在する摩利支天塚古墳の墳形は相似形という/大王と地方の大首長との間では、相似墳を認めることによって、同盟関係や従属関係が確認された/規制は規模であり、相似墳の造営は関係の強化であった



第6図 岡ミサンザイ古墳と摩利支天塚古墳
墳丘図は『古市古墳群測量図集成』・より引用

なお、以下の別稿も参照してください！

- ・ 行燈山古墳(天理市)
- ・ 佐紀盾列古墳群 その1(奈良市)
- ・ 津堂城山古墳(藤井寺市)
- ・ [岩戸山古墳\(八女市\)](#)
- ・ [百舌鳥・古市古墳群\(大阪府堺市・藤井寺市/羽曳野市\)](#)